回想分析を用いた旧街道型細街路の街路イメージの比較*
土地利用状況の異なる旧街道型細街路を事例として

Comparison of the street image in the old high streets by using analysis of memories *

亀谷一洋**・山中英生***・三宅正弘****
By Kazuhiro KAMETANI**・Hideo YAMANAKA***・Masahiro MIYAKE****

1．はじめに

現在のまちづくりにおいては、ハード、ソフトにかかわらず、対象地域で生活している住民の意見を聞くことは重要な意味合いを持っている。今日、住民の意見聴取の方法としてはアンケート調査が一般に用いられているが、表層的意見の収集にとどまることが多い。一方、ワークショップではグループダイナミックスを用いた効果的な意見収集が試みられているがその体系的分析方法は確立していない。

本研究では、街路計画での沿線住民の参加型手法として回想分析を用いて、街路設計に活かす情報を収集するという質的調査の開発とその有効性を明らかにすることを目的としている。具体的には、旧街道型細街路の再生計画を時間軸という概念を用いた回想分析手法を用い、インタビュー形式のヒアリングにより、なくなってしまった過去のイメージを記録し、オーラルヒストリーを分析することから旧街道型細街路のイメージを抽出する。先行研究[1)]では、旧街道の商店街においてこの手法で街路イメージの抽出をおこなった。本研究ではこの手法を住居系旧街道型細街路に適用し、有効性を検証する。また、２地区の回想分析結果を比較分析することにより、旧街道型細街路の持つ街路特性を明らかにする。

街路のイメージに関する研究は、安藤ら[2)]が、さまざまな街路を事例に、そのコンピューター・グラフィックスを用いてのイメージの定量化をおこなっている。平野ら[3)]は、繁華街での街路イメージの類型を明らかにしているが、旧道再生に関する研究事例は少ない。

本研究では、住居系旧街道型細街路として徳島県徳島市上佐古通りと商店街系旧街道型細街路として徳島県羽ノ浦町商店街を事例として、回想分析法を用いて、旧街道型細街路利用者が持つ旧街道型細街路の街路イメージの分析とその比較をおこなう。

2．回想分析

（１）　個別ヒアリング

今回、沿線住民に対して個別インタビューによるヒアリングを行い、回想分析をおこなった。この手法は、幅広い人達の意見を聞くことはできないが、被験者の意見を時間をかけて聞き取ることができ、詳細について追問することができる手法である。回想分析とは、今までの日々の生活において、前の道路で思い出す楽しかった（よい）イメージ、わるいイメージを被験者１人１人に個別インタビューし、その要素と連関を分析する方法で、臨床心理で用いられる重要事項分析の手法を道のイメージ抽出に改良したものである。インタビューの手順を以下に記す。

1)　被験者に「家の前の道で思い出す、よいイメージ、わるいイメージの出来事や体験したことを何でも自由にお話ください。」と問いかける。そして発言内容の時代や被験者の気持ちを確認するため、「それはいつの頃の話ですか。」とか「そのときあなたはどう思いましたか。」などの質問をはさみながら、その時の道路状況を具体的に話させ、イメージの年代を確認する。

2)　引き続き、「他に家の前の道で思い出す、よいイメージ、わるいイメージの出来事や体験したことはありませんか。」と問いかけ、そのイ

*キーワード：地区交通計画、市民参加、イメージ分析
**正員、工博、徳島市役所開発部公園緑地課
（徳島市幸町２丁目５番地、
TEL088-621-5295、FAX088-621-5273）
***正員、工博、徳島大学工学部建設工学科
（徳島市南常三島町２丁目１番地）
****正員、工博　　同上

メージの年代を確認する。被験者に自由に話をしてもらうことを目的とし、インタビューアは、聞き手に徹して、時代や道路状況を確認する問いかけのみを行うように注意し、この問いかけを繰り返し行う。

（2）イメージラダーでの分析

次に発言項目の内容を分解し、D.N.Hinkel によって開発されたラダーリング技法[4]を参考に以下の方法でイメージラダーを作成した。

たとえば、「家の前の道路で思い出すよいイメージ、わるいイメージの出来事や体験を何でも自由にお話ください。」との問いかけに対して、たとえば、「夏祭りに人がたくさん来てくれて楽しかった。」という回答があった場合は、まず現場で、「それはいつ頃の話ですか。」とその年代を確認する。

次に発言を「夏祭り」、「人がたくさん来てくれた」、「楽しかった」に分ける。

そして全体の概念である「夏祭り」を上位項目に、具体内容としての「人がたくさん来てくれた」を下位項目として配置し図上では矢印で示す。そして、「楽しかった」はよいイメージに分類する。図では、わるいイメージのみ▲印で表している。これを時間軸上に配置する。この作業を、繰り返し行うという手法である。

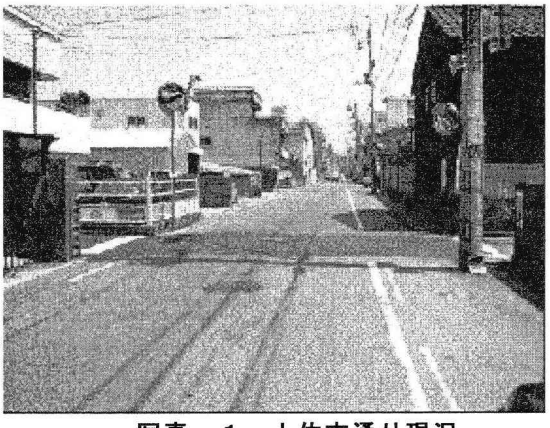
3．回想分析からみる上佐古通りの街路イメージの抽出

（1）上佐古通りの現況

図－1　上佐古通り対象区域図

調査対象は徳島市中心より西 2km に位置する佐古地区にある。国道 192 号線の１つ南側にある旧街道型細街路である。江戸時代から街並みは格子状に構成されていたが、昭和 28 年に国道が整備され現在の形となっている。

上佐古通りは、延長約 1,250 m、幅員 7.5～10.0 mの徳島駅方面への一方通行道路である。沿線は住宅地で住居は 106 棟、商店は 69 棟である。平日 12 時間交通量は約 1,400 台である。



写真―１　上佐古通り現況

（2）実験方法

上佐古通り沿線住民に対して、インタビュー形式によるヒアリングを行い、上佐古通りに関するイメージ把握を試みた。対象被験者は、60～80歳代の男性3名、女性3名である。インタビューは、平成15年8月～11月にかけて行い、状況については、テープに録音している。インタビュー1人あたりの所要時間は、特に決めていなかったが、実際には、20分から1時間程度であった。

（3）回想分析による上佐古通りのイメージ抽出

図-２は回想分析の結果である。

これより以下のことがわかる。

① 上佐古通り沿線の被験者たちは、少年、少女期に夜店や屋台などが出ていたことを、覚えていて、それをよいイメージとして持っている。

② 被験者の年代がよく似ていることもあるが、昭和初期から昭和２０年代まで道路上で多くの遊びを自分たちが体験していたことがわかる。

③ 終戦直後は、戦後の苦しい生活の状況や仕事関連の風景を街路イメージとして持っている。

④ 琴の音や駅の灯りなど、物質社会とは違った

年代＼キーワード	遊び(子供たち)	交通	生活	風景，風情
昭和初期	周りに空き地が多かった(2) →かくれんぼをした →鬼ごっこをした バイ(こま)，メンコ(5) →メンコに油を塗って重くした 夜店がでていた(2) →親から5銭もらって買いに行った 夏は夕方行水して，みんなで集まった →一脚が出ていた 露店でパットライスを売っていた 自転車に乗る練習をした 自家製のバット，ボールで野球をした →ホームランを打った	子供の時，パンという音に馬車の馬が驚くことを見ることが楽しみだった		琴の音が聞こえた
昭和20年頃	釘立て遊びをした けんかの時に投げつけた	土の路面だった 馬車が走っていた(5) →馬糞があった →西へ行く馬車が多かった →荷台は空が多かった →阿南市から馬車で来ていた 自動車交通であぶないと思った	道路脇の溝に稲を植えていた →生活が苦しかった →雀が米のとぎ汁によってきた 畳表の天日干しをしているのを見た →風が吹いて畳表が溝に落ちた 家庭菜園に使った 普段の買い物は歩いていった(2) ことはない	徳島駅の灯りが見えた
昭和30年頃 ～ 昭和60年代	子供が通学するときの声が聞こえた	駐車禁止がなくて，路駐が多かった →▲知り合いが路駐の影響で交通事故 大雨で道路が冠水した(3) →床下浸水までで止まった		馬が道路脇の家の塀から首を出していた
平成	子供が遊んでいるのを見かけない(3) 学校へ通う通学風景を見るのが楽しみ ※（ ）は発言した人数を表す ▲はわるいイメージを表す →は，発言の具体的内容を表す	▲交通事故があった →長靴が店の中まで飛んできた ▲不法駐車 ▲交差点での一時停止違反 日が暮れてから歩いている人が多い	町内会世帯数よりマンション一軒の世帯数が多い	→▲夜間に騒がしい時がある

図―２　上佐古通りイメージラダー図

時代の風情が街路上に醸し出されていた可能性がある。人や物にはない街路の雰囲気ともいえるものが戦後しばらくはあったのではないだろうか。しかし最近では、これが騒音になっている。

⑤　子供が少なくなって街路上で子供を見かけることはほとんどなく、そのことが街路の雰囲気にも影響が出ていることがいえる。

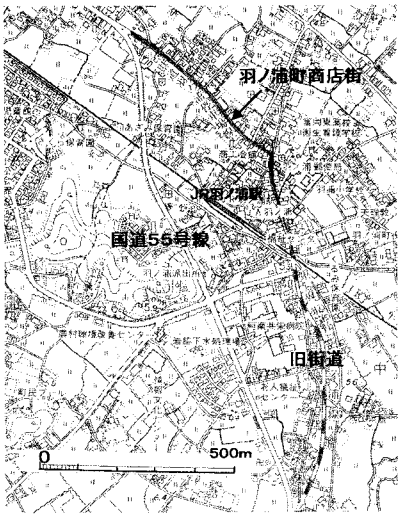
被験者の方が雑談で話していたが、その人の町内会は、子供会は３人だけで、７９歳以上の敬老会の案内を出すのは１６人となっている。少子高齢化の影響は、沿道利用者が感じる旧街道型細街路の街路イメージにも大きな変化を与えている。

４．旧街道型商店街との街路イメージの比較

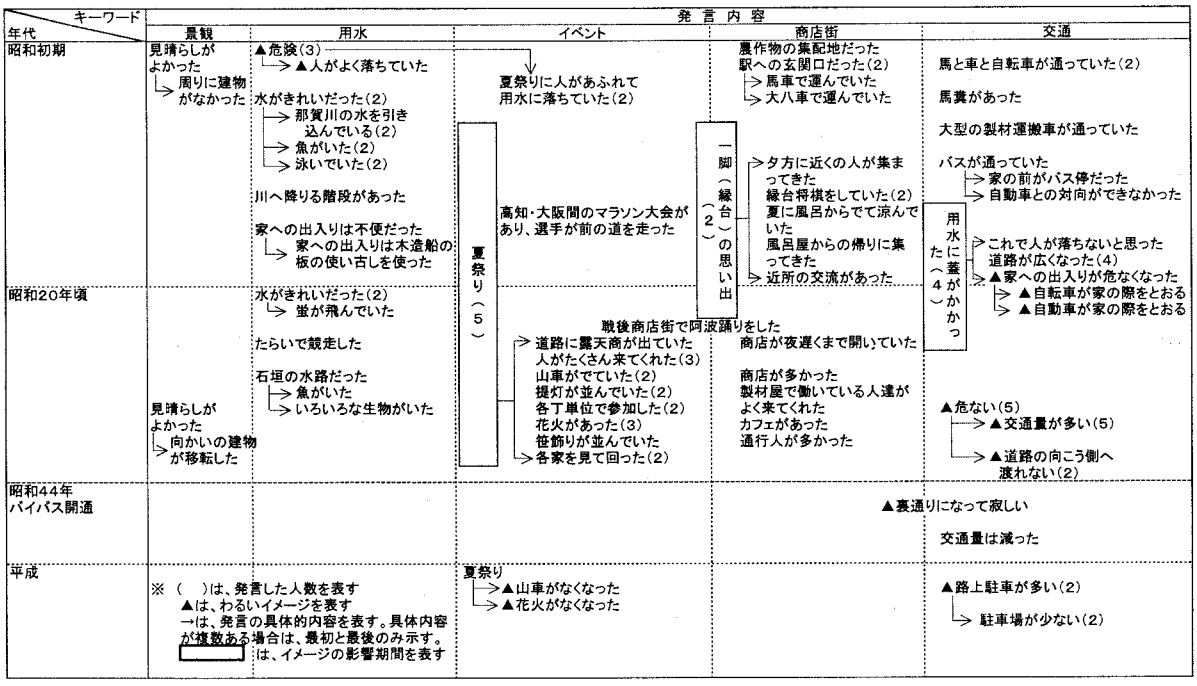
（１）羽ノ浦町商店街

次に回想分析を用いた商業系旧街道型細街路における街路再生コンセプトの抽出事例 [1] との比較分析を行った。

羽ノ浦町は、徳島県の南部に位置し、県都徳島市から南に約 15 ｋｍの距離にある、面積 8.9km^2、人口約 12,000 人の町である。



図－３　羽ノ浦町商店街対象区域図



図―4　羽ノ浦町商店街イメージラダー図

羽ノ浦町商店街は、羽ノ浦町の中心部に位置する延長約800m、幅員6～10mの旧国道沿いに発展した旧街道商店街で、古くは土佐街道として徳島県と高知県を結ぶ幹線街道上にあった。昭和初期には、一部道路の両側に幅2～3mの用水が流れていたが、昭和7年頃から順次、蓋がかけられ、昭和27年頃に商店街部分は全線蓋がかけられ、現在の道路断面形状が形成された。さらに、昭和44年に商店街を迂回する国道バイパスが完成し、旧街道は県道となる。現在、商店数は43店舗、民家は37軒、その他3軒となっている。被験者は、住民８名を対象で、50代から80代の男性７名、女性1名である。ヒアリングの詳細については参考文献[1]に詳説しているため、ここでは図―４に結果のみを表示する。

（２）イメージラダー図の比較

それぞれの路線でインタビューに応じてくれた被験者の年齢層が似通っていることに着目し、２つのイメージラダー図を比較分析する。

この２つのイメージラダー図を年代別に重ね合わせて、２つのイメージラダー図に共通にあるイメージと独自にあるイメージに分類した。また、上佐古通り、羽ノ浦町商店街それぞれの街路でしか発言されていない内容であっても、被験者の内容が明らかに２つの街路に共通となるイメージについては言葉が異なっても「ほぼ同一の情景を指し示す」発言として、中間イメージの欄に書き込んだ(昭和30年頃の路上駐車など)。その結果を表－１示す。

（３）街路イメージの共通性と独自性

表－１より、沿線住民が持っている旧街道型細街路の街路イメージは、共通性と地域の独自性のイメージがあることがわかる。

街路イメージの共通性は社会の流れに応じて、人々の生活習慣や共通の文化から生まれてきた行動形式に伴う街路イメージで、ここでは、まだ自動車の少なかった時代に夕方になると近所の人たちや、行水を終えた子供達が溜まり場となっている家の前の一脚を囲んで一日の出来事やご近所のことを話し合ったり、遊んだりしている情景がこれにあたる。

旧街道型細街路の再生を計画する際には、このような沿線で生活をしている人達が溜れる空間を設けることが設計コンセプトの１つになってくるのではないだろうか。限られた街路空間にこのような溜まり場を再現するには、さらなる通過交通量の削減や、速度規制の検討も重要な検討課題となってくると考えられる。

また、このような情景はさらに歴史性、幹線性

表－1　2つの旧街道型細街路の街路イメージの共通性と独自性

街路イメージ／年代	共通性		中間イメージ	独自性 上佐古通り（旧街道型細街路）	独自性 羽ノ浦町商店街（旧街道商店街）
昭和初期	一脚（縁台）の思い出	一脚(縁台)の思い出 周りに空き地が多かった 馬車が走っていた	こま，メンコをした 夜店が出ていた 露店が出ていた	自転車に乗る練習をした 野球をした 琴の音が聞こえた	駅への玄関口だった 農作物の集配地 夏祭り 用水 バスが通っていた
昭和20年頃		道路で遊んだ	買い物は歩いて行った	道路わきに稲を植えていた 畳表の天日干し 徳島駅の灯りが見えた	通行人が多かった
昭和30年頃			子供の通学の声が聞こえた 路上駐車多い 交通事故を見かけた		交通量が多い 商店が多かった 通行人が多かった
平成	路上駐車が多い		子供が遊んでいるのを見かけない	夜間に騒がしい	駐車場が少ない

を持っている旧街道型細街路独自のものと、その時代にどこの街路や路地裏でも見られた情景とに分類することも可能である。荷物を積んだ馬車に関するイメージなどは当時幹線機能を持っていた旧街道型細街路ならではの街路イメージといえる。また、今日では、路上駐車や交通事故の問題など、交通安全に対する発言が多かったことも両街道に共通している。

2地区の街路イメージを比較すると、住居系の旧街道型細街路と商業系の旧街道商店街では被験者が持つ街路イメージに違いがあることがわかる。

住居系の旧街道型細街路である上佐古通りは、自転車に乗る練習をしたり、野球をして遊んだりという街路で場所をとる遊びをしたイメージを持っている。また、夜は静かであったのか、琴の音が聞こえたり、中心市街地の徳島駅の灯りが見えたという風流なイメージも持ち合わせている。

一方、旧街道商店街の羽ノ浦町商店街では、街路に平行に流れていた用水路で遊んだイメージが強く残っていて、子供達にとっては日常生活の中で、用水と街路は一体となった空間として認識、活用されていた。また、古くからの商店街らしく、夏祭りの思い出や、早くからバスが通っていたイメージは商店街の活気があった時の時期とも重なって、被験者の持つ街路イメージを鮮明にしているといえる。

5．結　論

回想分析法を用いて沿線住民にヒアリングを行い、その結果をラダー構造で表現することにより、沿線住民の持つ旧街道型細街路に対する意識を図上に表すことができた。また、土地利用状況の異なる旧街道型細街路においては、沿線住民が持っている街路イメージには時代の変遷による旧街道筋ならではの共通性と、土地利用状況や地域文化のよって育まれてきた独自性があることを図上で表現できた。旧街道型細街路の再生にはこれらの独自性を街路ユーザーに想起、認識させる施策が必要と考えられる。

この回想分析は、旧街道型細街路など、歴史性を持つ街路再生について、沿線住民という「街路ユーザー」の視点を、設計者やまちづくりプランナーなどの視点と融合するための一手法としての有効であると考えられる。

今後は、旧街道型細街路の独自性をさらに分析するとともに、街路ユーザーが街路に対して持っている潜在的イメージを街路計画に反映するための参加型デザインプロセスへの応用について進めていきたいと考えている。

参考文献

1) 亀谷一洋，山中英生，三宅正弘：回想分析を用いた旧街道商店街の街路イメージの分析，土木計画学研究・論文集 Vol.20no.2，pp.433-440，2003年9月
2) 安藤直見，八木幸二，茶谷正洋：都市中心部における街路空間のイメージ分布，日本建築学会計画系論文集第497号，pp.155-162，1997年
3) 平野勝也，資延宏紀：街路イメージ類型を用いた繁華街構成分析，土木計画学研究・論文集，No.17，pp.533-540，2000年
4) 讃井純一郎，乾正雄：レパートリー・グリッド発

回想分析を用いた旧街道型細街路の街路イメージの比較

亀谷一洋**・山中英生***三宅正弘****

本論文では、旧道の再生問題について、回想分析を用いて土地利用状況の異なる旧街道型細街路における沿線住民が持っている街路イメージを分析した。その結果、歴史性を持つ旧街道型細街路沿線住民は、旧街道沿線という歴史性による街路イメージの共通性と土地利用状況や地域文化の違いによる独自性を持っていることがわかった。これより、旧街道型細街路の再生には、沿線住民が街路に対して持っている潜在的な街路イメージを想起させることにより、街路計画を作成する有効性を示した。

Comparison of the street image in old high streets by using analysis of memories *

By Kazuhiro KAMETANI**・Hideo YAMANAKA***.・Masahiro MIYAKE****

In this paper, streets image was analyzed by using analysis of memories in the old high streets. Two types of streets which have different land use were compared. Consequently, residents of along the streets have similarity and peculiarity about the streets image. Validity of using analysis of memories on the planning of old high streets is found as results of this study.